

ノジヤンのギベールの回想録(二)

——中世都市ランのコミュニケーション運動——

守 山 記 生

第六章

司教はあたかも教皇殿への対面を享受するかのようになり、ローマにとどまっていたが、その間、フランスの方から彼に吉報が届きはしないかと熱烈な期待をもって耳をかたむけていた。とうとう彼の願望の達成が通知されるに及んで、主なる教皇は一つの大教会で大きな犯罪がなされたことを知った。司教は教皇に拜えつし、へつらいの贈物によってこの非行に対して自分が疑いをかけられることを払拭した。このようにして、かつてない程にうきうきして、ゴードリはローマをあとにした。

《以下ギベールの説教を主に中略——訳者》

聖職者の要請と市民の願望に答えて、私のした説教のほかに他の言葉も一緒に織込んで、私は以下のことを宣言し

た。即ち、この貴族ジェラルルの暗殺者たち、その犯行の支持者と同盟者はラン司教座教会を落着かせようとしている司教ユベール Hubert によって破門されるべきであり、彼らをかばいかくまった者も同様に処せられるべきである。彼らの破門が我々のすべてによって宣告されたとき、正に当教会は落着きをとれどした。とかくするうちに、この破門の宣告が都市から離れていた副司教と貴族たちの耳に達した。私が行った説教と宣告された破門の故に当教会から切り放されてしまった者たちのすべては私に彼らの憎しみを向けた。特に副司教ゴージェイエは逆上して私に対して激怒していた。本当におそろしい雷鳴が聞かれたが、しかしそれからは神のご意志によって稲妻は全くはしらなかった。こっそりと彼らは私に反対し、うわべでは彼らは

尊敬を示した。さて、私が置き去りにしてきたところのことに、もどることにしよう。

教皇の教書を携えて、我が司教はローマからの帰途にいた。ジェラルルの暗殺後、国王は司教が不在を装ってかくそうとしたこの犯罪の当事者であると確信したので、彼は司教館から穀物、ブドウ酒、肉類を実力で押収すべきことを命じた。司教がローマにまだ居た間に、彼はその実力行使とその理由を知らされていた。それで手紙が国王に送られた。国王は彼をその管轄司教区から閉め出すべきことを決定し彼の財産を奪っていた。そして他の手紙が同僚司教と彼自身と他の司教区の大修道院長に彼によって発送された。前述したように、エレット河 the Ailette にかかっている橋はランとソワソンの両司教区の境界にあったが、それで我々が破門したばかりの副司教と貴族は司教が自分の司教区の土に第一歩を踏んだときにそこで彼をはやばやと出迎えた。一方、彼は彼らを情愛のこもった口づけと抱擁で迎えた。その結果、彼が帰ってきた自分の司教管区で首座であったが、神のご意志で我々が奉仕しているノートル・ダム教会にあえて行かないで、その近くで彼が自分のみ忠実な者であると考えた人々と長話をした。ここをた

って、彼はクーシーですべての同行者ともども歓待された。

私がこのようなことを知って、司教の側にたつてそのような振舞いをするのを大いに恐れていたもので、私は司教に会ったりあいさつしたりすることを全く控えた。私に間違いがなければ、三日後、司教は私に対して内にこもらせていた狂気の沙汰を表向きには和らいでいるように装って（何故なら彼の追従者たちが前述した出来事について彼の面前で私をばげしく攻撃していたからである）、そして彼は彼の許に来るように私に命じた。私が彼の家に現われたとき、そこは破門された者や暗殺者で一杯なのを見て、私は腹立たしくなった。彼は教皇の手紙を見せて、私が教会から彼を排除しようと努めていると非難した。私は、神のみぞご存知のように自分の心からではなく、自分の心にそむいて、自分のできる限りの助力を約束した。何故なら、クーシーのアンゲランが司教のそばに座っており、ジェラル暗殺の前日に自らの舌先で二人の暗殺者たちの剣をといだ伯夫人に彼はちやほやされていたのを見るにつけても、彼自身が統轄する教会が破門にし、それほどに大層教会を汚した者たちと疑いもなく悪しき交渉をしていること

を私は知ったからである。彼は国王の命令によって当市から閉め出されていたので、無分別極まりない大胆さでもって、彼は市内の他の騎士たちの助力で都市に入ると威嚇し、皇帝カエサル *Cæsars* にしてもほとんど不可能と思われる軍事力でそうするだろうと宣言した。彼は騎士の一隊を集め、不正な手段でため込んでいた多額の金銭を費やしたが、彼にはいつものように、強力な軍事力で入市することはいっこうに実現しなかった。とうとう非常に多くの援軍に嘲笑以外の何も与えずじまいで、仲裁人の助力と巨額の賄賂で、彼は自分自身と彼のジェラルド暗殺の仲間、即ち、ラン市の貴族と副司教兩人のために前国王フリップの息、国王ルイと折り合いをつけた。

ラン市に帰った後、司教はサン・ニコラ・オ・ボア *Saint-Nicolas-aux-Bois* で野外祈禱集会を催して、そこで彼が行ったミサの間に、彼はジェラルド暗殺後その共謀者たちの財産に損害を与えて当市から立去った者たちを破門にせんとする旨を宣告した。彼がこのことを述べるのを聞いて、私はとなりに座っている仲間の大修道院長の耳に小声で話しかけた。「この愚かな歪曲をよく聞きたまえ。彼はあのような恐るべき犯罪で自分の教会を汚した者を破門しなけ

ればならないのに、逆に彼は暗殺者たちに正当な裁きを課した者たちに復讐している。」司教は良心をもつすべての人を恐れていて、私が小声で話しているのを見て、彼は私が彼のことを話していると考えた。「修道院長さん、何を話しているのですか」と彼はたずねた。その時、副司教グーティエは自分が話す許可をえる前に出しゃばって言った。「司教殿、貴方ははじめていたところのことを続けて下さい。修道院長殿はほかの事を話していたのです。」

このようにして、神聖をけがす虐殺者の結末、それは聖職者と市民によって呪われた行為であるが、その結末を乱した者たちを彼は破門した。司教がジェラルドの暗殺者たちの破門をととも長く引き延ばしたので長い間都市と司教区のすべての人々が司教に対して憤激していた。やつのことで、自分自身がすべての人々から疑われほとんど呪われているのを知って、彼は有罪者とその仲間を破門した。その上、彼は国王とともに彼を援助してくれた国王宮廷人や暗殺者の仲間にも多くの金を約束していたので、彼がその約束から手を引きはじめたときに、公に彼が耳にした非難がどんなものであったかを誰が話せようか。司教が多量の金銀によって、この事件で彼を支持した各人にのしかかる

さげたい懲罰を彼らの身から遠ざけない限りは、各人はあえて国王の法廷におもむこうとはしなかった。それにもかかわらず、司教の方はローマ教皇庁が彼を容赦していると知らされたので教会によって罪を訴えられることはなかった。

第七章

司教が仕えもし又友人でもあったイギリス国王から金を引き出すためにイギリスへ出発してしまつてからしばらくして、副司教のゴージェとギー及びラン市の貴族は次のような企てを工夫した。古くから、ラン市では神もどんな領主も恐れられず、それぞれの人間の實力と欲望にしたがうままで、公権力が略奪と殺人に巻き込まれていたということが当市の不幸であった。厄介事の種から始めると、王者らしい厳肅さで尊敬されねばならなかったはずの国王といえども当市にたまたまやって来た際にはいつも、まず彼自らがその所有物に破廉恥にも罰金を科せられた。国王の馬が朝か夕方に水を飲み連れ出されたときには、その馬丁はなぐられ、馬は奪われた。また、以下のことも事実であった。即ち、聖職者たち自体もとても侮られていて、彼らの従属民も財産も容赦されず、当時の状態は、「民にそ

うであると同様に、祭司にもそうである」という文言通りであった。ましてそれでは下層階級の人々については何と云つたらよいであろうか。最上の保証つき通行券を持たない者は誰も当市に近づくことさえできなかったのであるが、当市にやって来た農民は一人残らず牢に投げこまれたり、身代金の要求のために捕えられたり、たとえうまくいったとしても不法な訴訟に引き込まれたりした。

一例として、もし野蛮人である無法の民スキタイ人の間で起こつたとしても最大の背信として判断されたであろう一つの行為を引用してみよう。さまざまの方面からの農村の人々が売買するためにランの市場へやって来る土曜日のことであつたが、市民たちはコップや皿やその他の種類の秤に入れた野菜、小麦、その他の製品を売り出すために運びまわつていた。市場で市民たちがそのような商品をさがし求めている農民たちにそれらを売りに出し、買手が値を決め買うことに同意したときであつた。商人は言つた。「俺の家までついてきな。俺がお前に売ろうとしている製品の残りをそこで見せようじゃないか。お前は見たものを持つていくがよい。」買手は従ひ、その貯蔵箱のところへやって来たとき、その一見して正直な売手はふたをとりそれを上

にあげながら言った。「お前の頭と肩を貯蔵箱の上にかがめて、市場で見せた見本と残りの分が違っていないことをたしかめてくれ。」そこで買手が貯蔵箱のふちにのり出して、それに自分の腹をもたせかけたとき、後に立っていた利口な売手は彼の両足を持ち上げてこの油断した男を貯蔵箱の中に突き落とし、落ち込んだと同時にふたをしてしまった。こうして、商人は農民が自分の身代金を出すまでは逃げられる心配のない牢に閉じこめてしまったのである。このようなことやこれと類似した他のことは当市では常であった。有力者たちやその手下は公然と窃盗や強盗でさえはたらいていた。誰も夜には安全に外出できはしなかった。というのも、彼は確実にぬすまれるか、つかまえられるか、殺されるかしたからである。

副司教たちとともに聖職者と貴族は、このような状態を考慮し、民衆から金を引き出す手段を求めて、彼らがふさわしい金額を出せば、コミュニオン *commune* 結成を認可するという機会を彼らの代理人を通じて彼らに与えた。ところで、「コミュニオン」とは民衆が隷属的賦課租としてその領主に支払わねばならない従来からの人頭税 *head tax* をすべての者が年に一度の一括払いで済ませようとする取り決め

に対してつけられた新しくて邪悪な名であり、もし誰かが罪を犯したとしても法によって定められた罰金を払えばよく、隷属民に従来通り課せられるその他のすべての課税 *taxation* は完全に廃止される。民衆は彼らの賦課租を緩和するこの機会をつかまえて、とても多数のどん欲な男たちの大口を開いてほしがっている財布を満たすために巨額の金を集めた。驟雨のようにこれらの人々にふりそがれた収入に喜んで、彼らはこの事柄で彼らがした約束を守るであろうとの誓いを与えることによって自分たちの誠実をはつきりと示した。

このようにして、聖職者、貴族、民衆の間で相互扶助の誓約団体が樹立された後に、司教はイギリスから沢山の富を持って帰ってきた。この革新に責任のある人々に腹を立てて、長い間彼は入市しないままでいた。しかし、とうとう、名譽と栄光にみちた争いが彼と彼のぐるであった副司教、ゴージェイエの間ではじまった。この副司教はジュエールの死に関して司教について非常に適当でない言説をなした。私は司教がこの事件でどんな共謀をしたのかは知らないが、彼がゴージェイエについて次のように私に不満を述べたのを覚えている。即ち、「修道院長さん、もしゴージェ

が何かの会議でわしに対する非難を持ち出すようなことがあっても、あなたは立腹しないでそのまま受けとられますか。あなたがあなたの所屬の修道士を残してフリ^{Fr}に退いた当時、彼は公にはあなたの側につきながらも私的にはわしがあなたに反対するのをそそのかして、表向きではあなたにへつらいながらもひそかにあなたに反対を持ち出しはしなかったかね。」このように話しながら、彼は自分に対する非難が途方もなく重いものであることを知り、非難が衆目の一致する所となるのを恐れ疑って、私がこの危険な男に反対するようにおびき込んだ。

司教はこの団体に誓約していた人々とこの処理の主導者である者たちには自分は激怒していると語っていたけれども、しまいにはこの声高の言葉も多量の金銀の提供によって突然に静められてしまった。そして彼は、ノアイヨン Noyon 市とサン・カンタン Saint-Quentin 市の両特許状の文言にならって、⁽⁷⁾当コミュニティの諸権利を維持するであろうと誓った。国王も又、民衆からの賄賂に誘われて、誓約によって同様のことを確認した。

おお神よ、民衆からこのように多くの贈物を受けとった後で、彼らが自分たちが誓っていたことをくつがえすため

に新たな誓いをたてたときに、即ち、彼らの課税の軛からひとたび隷屬民を解放した後で彼らを以前の状態にもどそうとしたときに、引き起こされた紛争を誰が述べることが出来るであろうか。司教と貴族の市民に対する憎しみは実に執念深いものであったが、この司教はノルマンディやイギリスのやり方にならって、フランス人の放縱を粉砕するほどには強力ではなかったのので、飽くことを知らないどころか、欲によって彼の聖なる使命を忘れて、不活発のままであった。市民の一人が法廷に連れ出されたときにはいつでも、彼は神の意志に従うのではなく、次のような言い方ができるとすればいいがかりという手管によって、最後の一ペニまで彼の財産を取りあげられた。

収賄には普通すべての正義の破壊が伴うものであるから、貨幣製造人は、たとえ彼らの仕事で悪事を働いたとしても金を出せばその罪を免れることができると知って、とても品質の劣った金属を使って鑄貨を改悪した。そのために、多数の市民が窮乏した程であった。彼らは最も安物の青銅を鑄貨に使っておきながらある不正直な行いによって一時的に銀貨よりも光沢のあるようにみせかけたので、愚かな市民の眼を破廉恥にもだましたが、市民は価値の高い

ものや少いものを手放しても、交換によって極めて不純な硬貨しか得られなかった。司教殿がこうした仕方を容認した結果は、十分な報酬を受けたのであるが、このことによってラン司教区内だけではなくあらゆる所でさまざまな崩壊を速めることになった。彼は自分が改悪してしまった通貨の価値を維持し改良するには当然無力であったので、しばらくの間、これも又とても品質の劣っていたアミアン Amiens 銅貨を当市内の通貨に定めた。彼はこれらの貨幣も決して命をつないでおくことができなかつたので、彼自らを象徴する司教杖をきざみこんでいた当時の貨幣を増⁽⁹⁾増⁽⁹⁾した。これはひそかな嘲笑と軽蔑でもって迎えられたが、増⁽⁹⁾増⁽⁹⁾されたものは以前の質の劣った貨幣よりも一層価値のないしろものでさえあつた。

しかしながら、この新通貨が発行されるにあたって、何人もこのおそろしく不快なデザインを嘲笑してはならないという布告が出されたので、市民はこの司教の布告の悪口をいった科でたびたび訴えられて、そのためにあらゆる種類の重い罰金を課された。その上、あらゆる点で最も悪名の高かつたティエリ Thiery という名の修道士は、フランドルやその生まれ故郷であるトゥルネ Tournai からとても

大量の銀を持ち込んだ。それをばすべてこの正に品質の落ちた司教杖印の入つたラン貨幣に鑄造して、彼は周辺地方一帯にそれをばらまいた。この憎悪すべき贈物で当地方の金持ちたちのどん欲さに訴え、うそ、不正義、貧困をもちこむことによつて、彼は当地方から真実、正義、富を奪つた。ローマ期の囲壁内に由緒ある全く尊ぶべき当市の貨幣鑄造所が置かれて以来、どんな敵対的行動や略奪や焼打ちもこれ程にはかつて当地方を傷つけはしなかつた。⁽¹⁰⁾

遅かれ早かれずっと隠されていた罪は

とりつくりのペールごしにまかり通る。

光り輝くものは隠しておくことができず、

明るい光線がグラスをつき通るように、

罪はその顔つきごしに露になる。⁽¹¹⁾

ものであるから、司教が暗黙のうちにあたかも自分が責任がないかのようにジュエラールに対してやったことをば、彼はしばらく後にもう一人のジュエラールに対してしでかすことによつて、その残酷さをまざまざと見せつけた。このジュエラールはある種の農村役人、即ち、司教配下の農民たちの荘園管理人であつた。司教は彼を特別の敵と考へた。なぜなら、ジュエラールは我々が当代で知るかぎり最も邪悪な

男であり、前述したあのアンゲランの息子と呼ばれる男であるトマの方へ傾きがちであったからである。司教はこのジェラールを捕えて司教館にある牢獄に彼を投げ込み、夜になると配下のアフリカ人に彼の両眼をえぐり取らせた。この行為によって、彼は公然たる恥辱を受け、彼が最初のジェラールに対してやったことの古い話が再び掘り起こされた。そして私に誤りがなければ、聖職者も市民も、トレド公会議 Council of Toledo の教会法は司教、聖職者、教会書記が死刑や手足の切断、眼のくりぬきのような体罰を課し執行することを禁じている、のに気がついた。この情報には又国王をも怒らせた。この話題がローマ教皇庁に達したかどうかは知らないが、教皇はたしかに彼の職務を停止した。そして彼は他の理由のためにそうしたのではないと私は信じる。事態を一層悪くさせたことには、この停職中に、司教は一つの教会を献納した。そのために、彼はローマに赴いて、再び贈物で主なる教皇をなだめて、彼は自分の権威を回復して我々の許にもどされた。このようにして、主従ともどもが行為と意志の点で邪悪の仲間であるのご覧になって、神はもはやその裁きを差し控えはなさらず、懷かれていた敵意がついに公然たる怒りとなって勃発

するのをお許しになった。人が向う見ずに誇りによって駆られていけるならば、神の復讐によって彼は恐ろしい没落で全く粉碎されてしまうものである。

四旬節 Lent の終り頃の我が主の最も聖なるご受難祭 Passiontide に貴族と特定の聖職者を呼び集めて、司教は自分が誓約している、又贈物で国王にも誓約させていたそのコミューンを攻撃することを決定した。彼は国王もその敬虔な務めのために寄りよせていたのであるが、聖金曜日 Good Friday の前日、即ち、洗足木曜日(15)に、彼自らがまず民におちいった後に、国王と配下のすべての人々が彼らの誓約を破棄するように指図した。前述したように、この日はかつての司教アスランが自分の王を裏切った日でもあった。(16) 彼が最も栄光に満ちた司教のすべての務め、即ち、聖香油の祝別や人々をその罪から赦免することを実施すべきであった正にその日に、教会に入る彼の姿さえ見られなかった。彼は誓約団体が破壊された後に国王が当市の法を以前の状態に戻してくれるように国王の廷臣たちと画策していた。しかし市民たちは彼らの廃止を恐れて、国王とその廷臣たちに四〇〇ポンドか出来ればそれ以上を約束した。これに応じて、司教は貴族たちが国王との会見に同行する

ことを要請し、彼らは自分たちの側では七〇〇ポンド出すことを約束した。フィリップの息、国王ルイは国王陛下として十分にふさわしく、軍事にかけて強力で、仕事においては怠惰を許さず、逆境にあっても不屈の勇氣を持っている注目すべき人物である。ほかの点では彼は善人であったけれども、この問題では、彼は実に不正義であり、どん欲によつて墮落した価値のない者たちに余りにも注目をしすぎたのである。このことは彼自身の大きな損失と非難を招き、たしかにここかしこで生じたさまざまな崩壊をもたらすことになった。

国王の欲望が上述したようにより多くの金額の約束の方へ向けられ、神に反して彼が裁決することになったとき、良俗、即ち、四旬節中の誓約による平和遵守に対してなんの配慮もされないで、司教と貴族たちの誓約は無効にされた。このような不正義によつて国王が市民の心を打ちのめした結果生じた騒ぎのために、彼はほかのどこでも好き勝手に宿泊する権利を持っていたにもかかわらず、その夜は司教館以外でねむることを恐れた。翌朝早くに、国王は出発した。そして司教は司教と貴族たちが約束した金額を司教自らが支払うであろうと貴族たちに知らせて、そのよう

に多額の金を出すことの協定については全く懸念するには及ばないと貴族たちに約束した。「もし、わしがその約束を果さないならば、それを払いきるまで国王の牢獄にわしを引き渡してくれたらよい」と彼は言った。

このようにして前述したコミューンの盟約が破棄されると、非常な怒りと驚きが市民たちの心を捉えたので、手工業者のすべては自分たちの仕事を放棄し、なめし革屋たちや靴屋たちの店は閉められ、宿屋の主人たちや小売商人たちは売るべき物は何も陳列しなかった。彼らは領主たちが略奪を始めれば何物も残されないと予想した。というのも、すぐさま、司教と貴族たちはすべての人々の財産を見積り、彼らは各人がコミューン創設のために出していたと判明している額をその破棄のためにも支払うことを当人たちに要求したからである。

これらの出来事は準備を意味する日 *Parsoeve* に起こった。聖土曜日 *Holy Saturday* になって彼らは主の血と肉とを受け取るための準備をすべきであったのに、現実には専ら殺人と誓約違反の準備をしていた。要するに、これらの日々における司教と貴族たちのあらゆる努力は彼らの下層民の財産を巻き上げるのにあてられた。しかし、これらの下

層民の方では彼らはもはやただの怒りではなく、野獣のような激怒につき動かされた。相互にたてられた誓いで結束して、彼らは司教とその同調者の死、いやむしろ殺害を目論んだ。四〇人が誓約に加わったといわれる。この大それた企てを完全に秘密にしておくことは不可能であった。このことが聖土曜日夕刻にアンセルム師の耳に達し、もし朝禱の務めに外出すれば殺されるだろうと知って、引きこもっていた司教に朝禱に出席しないようにとアンセルム師は伝えた。司教は過度の自尊心のあまり愚かにも言った。

「馬鹿なことだ、わしがそんな市民の手にかかって死ぬなんてあり得ないよ。」しかし、彼は口では彼らを軽蔑しながら、彼はあえて朝禱に出かけたり、教会に入ったりしようとはしなかった。

翌日、彼が聖職者の行列に加わったとき、彼は彼の家僕とすべての騎士にその外套の下に短剣を持って彼の背後についてくることを命じた。この行列の最中に、群衆の中ではしばしば起こるようにやや行列の乱れが生じ出したとき、市民たちのある者が物陰から姿を見せ、彼は自分たちの誓っていた殺害のチャンスがやって来たと考えた。それで、あたかも合図するように、「コミュニケーション！ コミュ

ーン！」と彼はくり返し大声で叫びはじめた。しかし、なぜならその日は祝日であったから、制止は容易であった。けれども、この事件は対立者の側を用心させた。それで、ミサを行った後、司教は彼の荘園から多数の農民を召集し、彼らを司教座聖堂の塔に配備したり彼らに司教館の防衛を命じたりした。もっとも、彼らとても司教が国王に約束していた札束は自分たちの財布から吸いあげられるにちがいないと知っていたので、彼をほとんど嫌悪しているといつてよかつたのであるが。

復活祭の翌日 Easter Monday には、聖職者がサン・ヴァンサン大修道院に会するのがならわしであった。共謀者たちは前日彼らがことを起こすのではないかと思われているのを知ったので、彼らはこの日こそは行動を起こすことを決めていた。彼らは貴族たちがみな司教と共に居合わせていることを目撃しなかったならば、行動を起こしていただろう。たしかに彼らは郊外で、私の年若いいとこである濃厚な性格の少女と結婚したばかりの罪の無い貴族の一人を発見したが、あえて彼を攻撃しようとしなかった。なぜならそのことで他の者たちにより一層の警戒体制をとらせることを恐れたからである。翌火曜日にもなると、もう

安全だろうと考えて、司教は自分を守らせるために塔や司教館に配置していたが、自らの費用で養わねばならなかった男たちを解散させた。次の日に、私は彼を訪ねた。というのは、彼の騒乱で彼が私のところの貯蔵の穀物とフランスの言葉でベーコンと呼ばれる豚の脚肉をぬすんだからである。私は彼に当市からこんな大騒ぎをなくしてもらいたいと要請すると、彼は答えて言った。「この騒乱によってやつらが何をするができると思うかね。たとえわしの下僕のムーア人ジャンがやつらのうちで最も有力な者を鼻先であしらうとしても、もうぶつぶつ不平を言うこともあるまい。それというのも今しがたこのわしの目の黒いうちにやつらがコミュニティと呼んでいるものをやつらに破棄させたのだからなあ。」私は少し話をしたが、その時この人物が極度にごう慢さをつのらせているのを見て、私は話すのをやめた。しかし、私が当市を離れる前に、彼のうぬばねのせいで我々は互いに責め合いの口論をすることになった。彼は多くの者から差し迫った危険を警告されたけれども、誰にも耳を貸そうとはしなかった。

第八章

翌日、即ち、木曜日に司教と副司教のゴージェイエがひる

の務めを終えて金集めに心を奪われていたときに、突然、「コミュニティ！」と叫ぶ者たちの騒ぎが当市内にわき起こった。それから、ノートル・ダム教会の身廊を通り抜け、ジュラールの暗殺者たちが行きかったまさにその戸口を通り抜けて、市民たちは大挙して司教館を攻撃した。彼らは剣、両刃の剣、弓、斧で武装し、槍状の棒を手にしていた。この突然の攻撃が露見するやいなや、このような襲撃の際には対抗して司教に助力することを誓っていた貴族たちがあちらこちらから彼の許に馳せ参じた。この馳せ参じた者の中には、ハンサムな顔つきで罪のない性格の持ち主である老貴族、城主ギマール Guimar the castellan がいた。彼は楯と槍だけで武装して、教会の中を走り抜けた。彼が司教の玄関広間に入ったそのときに、彼は自分の親友であったランベール Raimbert という名の男に剣で後頭部を打たれて、まず最初に倒されたのであった。その直後に、私のいとこと結婚したと先に話題にしたあのルニエ Renier が司教館に入ろうと急いでいたが、司教の礼拝堂の張出し玄関に上がり、身をかまえていた間、槍先をさけようと頭をひよいと下げてよけようとしたときに背後から槍でつかれた。彼はここの地上に倒れ、後に司教館の円天井から起こ

った火事でやがて焼死した。小事においても鋭敏で、大事においては一層鋭敏であった司教座教会守護アドン Adon the vidame は他の者とは離れていてこのように多くの者たちの間では一人では少しのことしかできず、どうにか司教館に達したときにも攻撃の全勢力に出くわした。¹⁹しかし、彼は槍と剣で抵抗して、一しゅんのうちに彼に襲いかかった者たちの三人を打ちたおした。そして彼は広間の食卓の上にはぼったが、そこで膝と他の何箇所かに傷をおった。しまいには、膝まづいてまわりを取りかこむ敵と抗戦して、長い間彼らを寄せつけなかったが、ついに彼の疲れきったからだに誰かの投げ槍がつきささった。まもなく、彼もその館をおそった火事で灰燼に帰したのであった。

不そんな群衆が司教を攻撃し司教館の壁の前でわめきちらしていた一方で、司教と彼を助けていたある者たちは石を投げたり矢を放ったりしてできる限りの力を出して群衆に抗戦していた。いまや、いつもそうであったように、司教は戦士としての大いなる心意気を示していた。しかし、彼は誤って、みだりにもう一つの剣（即ち、霊の剣でない世俗の剣——訳者）を手にしていたために、彼はその剣で滅びることになった。²⁰市民の容赦のない攻撃に抗戦するこ

とができなくなつて、彼は家僕の一人の着物をきて教会の倉庫へ逃げこみ、そこにあった樽の中にわが身をかくした。ふたが一人の忠実な従者によつてしつかりとしめられると、彼はもうこれですつかりかくれおせたと考えた。彼をさがしている者たちがあちらこちら走りまわっていたとき、彼らは司教よ出てこいと叫ばずに、極悪犯よ出てこいと叫んでいた。彼らは司教の召使の一人を捕えたが、彼は司教に忠実を通したので、彼からは何も聞き出すことはできなかつた。しかし、もう一人の男を殴打すると、彼らはこの裏切者のうなづき具合からそのさがし場所を知るに及んだ。彼らはその倉庫に入るやいたるところを探しまわつて、ついに以下のような具合で彼を発見したのである。

サン・ヴァンサン大修道院の隷属民でティエゴール *Tiegorand* という名の危険きわまりない一人の男がいた。彼はずつとクーシィのアンゲランの下僕の役人であり、アンゲランはソール *Solt* と呼ばれる所にかかっている橋の通行税徴収役に彼をつかせていた。時々、彼は通り過ぎる旅人が二、三人しかいないことをたしかめると彼らの所持品のすべてを強奪した。それから、旅人が彼を訴えることがで

きないように、彼は彼らにおもりをつけて河の中にはおり込んだ。彼がこのようなことをどれほどしばしばしてかしたかは神のみがご存知のことである。彼の窃盗や強奪の数は数えられないくらいであったが、その心持ちの抑制されない邪悪さは彼の見るも怖ろしい顔つきによく示されていた。彼はアンゲランと衝突してからは、すっかりランのコミュニティの立場に立っていた。以前に修道士や聖職者や巡礼者、又実に女性でさえ容赦しなかった彼はついに司教の殺害者になりはてたのである。この唾棄すべき攻撃の指導者・煽動者として、彼は他の誰よりもひどくきらっていたこの司教を探し出そうと懸命になっていた。

彼らがあらゆる容器を調べて彼を探していたときに、ティエゴは司教が隠れていた樽の前に立ち止まった。頭でふたをぶちこわして、彼はそこにいるのは誰だと何度も問い正した。殴打されて凍ったくちびるをほとんど動かすこともできずに、司教は「囚人」と言った。ところで、司教は冗談にいつもこの男をイザングラン Isengrin と呼んでいた。なぜなら、彼は狼のような顔つきをしており、この言葉はふつう狼の意味を持っていたからである。そこで、この暴漢は司教に対して言った。「ここにずっと貯蔵され

ているのはわがイザングラン閣下か。」彼は罪人であったが、なお救い主でもあった。にもかかわらず、彼は髪の毛を引張って樽から引き出され、何度もこぶしでなぐられた拳句、表に連れ出された。連行の場所は礼拝堂付司教ゴドフロアの自宅の前にあたる廻廊になった狭い小道であった。彼は自分が彼らの司教であることを止めもする、莫大な富を彼らに与えもする、この地方から離れもすると誓いをたてて、彼らに哀願したけれども、すでに心をかたくなにしていた彼らはただただ彼を嘲けてもてあそぶばかりであった。このとき、ブリュイエールのベルナル Bernard of Bruières という名の男が剣をふり上げて、残酷にも司教の神聖な頭からこの罪人の脳みそまでも砕いた。捕まえていた者たちの手の間からずり落ちた司教は息を引きとる前にもう一人の男から眼窩の下、鼻の真中を横につっ走る一撃を加えられた。その場で最期を迎えた司教はその両脚を叩き切られさらに多くの傷を加えられた。前司教が指にはめていた指輪を目にしてこれがたやすくぬきとれなかったので、ティエゴは剣でこの死人の指を切り落してその指輪をわが物にした。司教は丸はだかにされて配下の礼拝堂付司教の自宅の前の一隅に投げ捨てられたのである。神

よ、彼がそこに横たわっているというときに通行人によつて彼に浴びせかけられたあざけりの言葉の数々や彼の死体に投げつけられた土や石や汚物のことについて誰が詳しく話すことができましようか。

《以下原文の一五行省略——訳者》

第九章

《この章では、大筋として、コミュニケーション軍に攻撃された高位聖職者や貴族の妻子の逃亡の様子が詳細に述べられている——訳者》

第十一章

《内容の時期的前後関係から、第十一章、第十四章、第十章の順にとりあげる。また、いずれも各章は部分訳にとどめる。先ず、第十一章の冒頭から——訳者》

邪悪な市民たちは自分たちが犯した罪の大きさを十分に思い知ったとき、彼らは恐怖にかられ、国王の裁きを大いに恐れた。その結果として、彼らは救済策をさがし求めべきであったのに、一つの傷にもう一つの傷を加えたにすぎなかった。なぜなら、彼らは国王の攻撃に備えて彼らを防禦するために、クーシィのアンゲランの息といわれるマルルの城主トマに頼ることを決めたからである。

《コミュニケーション市民に支援を求められたトマはどのようにしたのであるうか。ギベールに聴いてみよう——訳者》

悪事を働いたあげくのはてに、市民たちは国王に対して自分たちを保護しに来てくれることを要請して彼に助けを求めさせた。ついに彼がそうするに及んで、市民たちは彼の入市を認めた。市民たちの要請を聞いた後、彼は自分がいかにすべきかを配下の者たちと談じた。彼らは皆そろって、彼の力では国王に対して当市を防衛することは不可能であると答えた。自分が市内にいる間はこの決定をばこれらの狂気じみた者たちにあえて知らせようとはせずに、彼は彼らに平地に出てくることを命じた。そこで彼は自分の忠告を吐露するつもりであった。彼らが都市から一マイル程離れたところにやって来たとき、彼は彼らに話しかけた。「ラン市は王国の首都(ランは後期カロリング朝ではあたかも首都のような観を呈した。ギベールは自分がこのような伝統に忠実であることを示している——訳者)なのだから俺が国王に対して当市を防衛するわけにはいかん。だが、お前たちが国王の軍隊を恐れているならば、俺に従ってわが領地にやって来い。そこで俺をお前たちの保護者とも味方ともするがよい。」このような言葉を耳にして彼ら

は大層びつくりした。しかし、自分たちの犯した悪行のゆゑに恐怖でとりみだし、国王は自分たちの命をおびやかすと考へて、数えきれないほどの群衆はまもなく彼に従つて逃亡した。

《主に近隣民衆のラン市略奪の有様についてギベールは次のように述べている——訳者》

それから、噂はベガサスの速さが外部に伝わり、この都市は住む人として無くなつたとの話で近隣の農村や都市の人々をかきたてた。それでこの地方の民衆がどつとこの人気のない都市に押しかけ、財産は一杯あるけれども守るべき人としていない家々を我が物にした。明らかに裕福である都市民は貧しい身なりで自らを偽装していた。なぜなら、彼らは自分たちに立ち向わんとする貴族たちの眼を刺激することを恐れたからである。

《今度は貴族の略奪についてギベールは以下のように言っている——訳者》

当市から逃げ去つた者たちが、そのにくんでいた聖職者や貴族の家々を略奪したり火をつけたりしたのであるが、今度は居残っている貴族たちが逃亡者たちのあらゆる財産や備品を錠前やかんぬきに至るまで奪つたのである。

第十四章

《一—一三年頃から反乱コミュニンの弾圧は本格化するが、反乱の指導者ティエゴはその後どうなつたであろうか——訳者》

我々は他の事柄に移る前に、司教ゴードリに対する裏切者で殺害者であるティエゴは司教殺害の二年後にアンゲランの騎士たちによつて捕えられ、絞首台に送られたといふことを言っておかねばならない。彼はほとんど吐くほど飲み食いした後四旬節に捕えられた。彼の腹を突き出してそれを自分の手でなでまわしながら、なんとも冒瀆的な言葉だが、自分は神の栄光を十分に受けていると彼は何人かの面前で自慢した。ひとたび捕えられ牢獄に投げこまれても、彼は神にも人にも許しを乞わなかつたし、処刑のために連れ出されたときさえ、彼は誰に対しても何も言わずに共に生きてきた神に対する無感覚のうちに死んでいった。

第十章

《一—一四年八月二九日、ラン司教座聖堂の再建式にランス大司教ラウール Raoul は出席して、以下のような勸告をした——訳者》

ミサの間に彼は、法と神聖な旋に反して隷屬民がその領主の支配からまぬがれるところのものである呪うべきコミュニティについて説教をした。「使徒(ペテロ)曰く、『僕たる者よ。心からのおそれをもって、主人に仕えなさい。』更に、僕たる者は、その主人ががん固でどん欲であるという口実として使わないように、その続きに耳を傾けるべきである。即ち、『善良で寛容な主人だけにでなく、氣むずかしい主人にも、そうしなさい』と……。」

《いったんはラン市のコミュニティ運動は弾圧される。しかしながら、同市のコミュニティは勢力をとりもどし、一一二八年八月二六日ルイ六世から特許状を受け、コミュニティは「平和の制度」*Institutio Pacis* として復活した——訳者》

[注]

(1) この時期の世俗領主たちによって要求された王の諸権利の一つは、*ius spoli*、即ち死んだ司教の私的財産を我が物にする権利であった。国王はあたかもゴードリが自分の犯罪のために既に位をしりぞけられたかのようにゴードリの所有物をとりあつかった。

(2) フィリップ一世の息、ルイ六世は一一〇八年から一一三七

治していた。

(3) ランから八マイルのところにあるボア Vois の森のベネディクト派のこの大修道院は一一〇八年頃に建立された。

(4) ランは國王都市であり、國王はそこでは好き勝手に宿泊する権利を持っていたのだから、國王が「罰金」を払わなければならなかったり、彼の馬が奪われたというギベールの言及は、何かもつと理解しやすい行為の多分歪曲された情報であろう。ランのエルマン Herman は以下のことを言及する。即ち、フランスの國王がランで大祝日に戴冠されたとき、彼はサン・ジャン教会へ黄金の王冠をはこんだし、國王や他の誰でもこの大修道院の囲壁の外に自分の馬を置いて行くことを要求された。Migne, *Patrologia latina*, t. 156, col. 1004 参照。

(5) イザヤ書 二四・二

(6) ギベールのしばしば引用されるこの定義はコミュニティの目的を恣意的な負担と隷屬的賦課租の制限にかぎっている。

(固定された隷屬的賦課租の年払いは、もちろん、隷屬状態自体を終らせないだろうということに留意すべきであろう。) この定義は明らかに狭すぎる。何故ならこの章の冒頭で、ギベールはコミュニティを必要とした発端は暴力、不法、裁判権の恣意的な行使に対する反動として生じたということを示しており、彼は後でこのようなコミュニティを「聖職者、貴族、民衆の間の相互扶助をめざす誓約団体」と呼ぶことにしているからである。コミュニティの役割を階級闘争の表現としてよりもむしろ平和を確立するための制度として示しているパイオニア的研究としては、Albert Vermeesch, *Essai sur*

les origines et la signification de la commune dans le Nord de la France (Heule, 1966) をみよ。一一二八年にランで最終的に制定されたロムモン特許状については、Ordonnances des rois de France (Paris, 1723-1849), XI, 185-187 をみよ。

(7) ノアイヨン司教ボードリ Baudry が自分が当市にロムモンを設立したと宣言する一一〇八年頃の特許状は、とても短く、都市の行政について何も語っていない。多分、現存していないもう一組の書かれた規約があったのであろう。一一〇二年頃に出されたサン・カンタンの特許状も現存していない。

(8) 多くの中世の貨幣鑄造所は、およそ三分の一の銀と三分の二の銅である貨幣用の合金をつかった。この合金は直火で熱せられると、表面の銅の多くは酸化され、さらに合金が打ちつけられてもはがれ落ちない銀の豊かな層をのこした。結果として、熱したり打ちつけたりすることによって貨幣をつくる通常の中世の行為は、すぐにではないが、あざむいて豊富な銀の表面をつくり出した。ローマ時代の行為であった銅貨の上に銀めつきを施すというよりもむしろ、多分上述したことが、ギベールが言及する「不正直な」工程なのであろう。この時代の極めて多くの貨幣は銀をよくも割合が非常に低いので、広く行われていた貨幣の品質低下の工程はランに固有であったということを、ギベールは誤って示唆している。

(9) これらの貨幣は現存していることを全く知られていない。

(10) シャルルマーニュと彼の後継者たちはランで貨幣を発行した。Karl F. Morrison and Henry Grunthal, Carolingian

Coinage (New York, 1967), nos. 127 ff. 参照。カロリング時代の貨幣は銀の高含有量をもつ。これに比して、後代の銀銅合金の貨幣を劣悪に思わせた。

(11) これらの詩句は未確認である。ギベールもまた創世記に関する彼の評釈の中にこれらの詩句を引用した。

(12) マルルのトマの不確かな生まれについては、この史料紹介の前号、即ち、奈良史学、第3号、注(10)で前述した。

(13) 司教配下のジャン「leg」はここではエチオピア人とよばれ、四八頁ではムーア人とよばれている。ギベールの言葉は、別に彼の地位を示さずに司教がジャンを所有したということを示す。彼は多分私的な隷属状態におかれたのであろう。

(14) Cf. 箴言 一六・一八

(15) 洗足木曜日是一一二年四月一八日にあたる。この日のための本来的な「敬虔な務め」とは国王が貧者の足を洗うことであった。

(16) この史料紹介の前号、即ち、奈良史学、第3号、79頁に前述。注記したように、ギベールの日付は他の歴史家のそれとは異なる。

(17) ルイ六世(肥満王)として歴史に知られる人物を注目すべき人 *persona conspicuus* と呼ぶギベールの語調を判断することはむづかしい。

(18) 準備を意味するギリシャ語からきた聖金曜日に対する古い用語。

(19) 司教座教会守護 *vicodominus* は教会財産を保護し統治する任にある俗人の領主であった。ランでは、キエルジーのジ

エラールがランのサン・ジャン大修道院の守護であったし、モンチギユのロジエ Roger of Montaigne がその大修道院の城主として引きついた。司教座教会守護のアドンは司教の役人であったと思われる。司教のために戦ったランのもう一人の重要な貴族は、城主ギマールであった。彼の称号からの必然的な結論ではないけれども、彼はランの古い城砦を託されていたのかもしれない。いずれにせよ、ランでは司教座教会守護と城主の双方に対する余地があった。

(20) Cf. マタイ福音書 二六・五二 ほんらい司教は霊の剣をもつ。

(21) この多く議論された文章に関しては Lucien Foulet, *Le Roman de Renard* (Paris, 1914), pp. 75-89 参照。

(22) トマはクシーのアンゲランが離婚した彼の母からマルルの領主権を受けとっていた。それ故に、彼はアンゲランと対立することができる親ゆずりの勢力の拠点をもった。一一一六年のアンゲランの死後、トマはクシーを引き継いだ。アマアン伯領を獲得することはできなかった。ギベールやシユジエール Suger によって弾劾されて、トマは全くの封建的悪行の一例として歴史家たちによってしばしば描かれてきた。彼をであるだけ多く復権をせよとする同情的な研究に *Le sire de Coucy*, Jacques Chaurand, Thomas de Marie, Sire de Coucy (Marle, 1963) を参照。

(23) ベテロの第一の手紙 二・一八